

米山梅吉記念館 春季例祭 お知らせ

多くの皆様のご来館をお待ち申し上げております。

[日時] 平成29年4月22日(土)午後2時～ ●開会前墓参

[場所] 米山梅吉記念館ホール

●講演(14:30～)

[講師] 阿部 志郎 氏

(神奈川県立保健福祉大学名誉学長)

[演題] 愛されて生き、
生きて愛する

●アトラクション

岸 ミツアキ 氏

プロのジャズピアニストによる演奏

●懇親会(16:20～) 登録料無料

ロビーにて講師を囲んでの懇親会

多くの皆様のご参加をお待ちしております。

米山梅吉研究に欠かせない一冊!

ロータリアンとして、教育者として、
社会奉仕者としての米山梅吉研究の集大成

超我の人 米山梅吉の聲音
あし あと

米山梅吉記念館の創立35周年を記念して編集された本書は、米山梅吉の生涯や業績、記念館建設の経緯などを知る上での格好の一冊で、「生き立ちと人なり」「ロータリーとのかかわり」「記念館の歴史」などの章には、多くの資料と共に詳細な解説がなされています。資料編として、米山梅吉が会議や大会で行った挨拶や講演、ロータリー月報やラジオ放送の内容なども掲載。記念館所蔵の図書目録、年表など網羅されています。

(財)米山梅吉記念館刊



B5判／上製本
本文268ページ／2,500円
記念館刊

日本のロータリークラブと
信託業の創始者

点描 米山梅吉

三井信託副社長を務めた著者が、佐々木邦氏の『米山梅吉伝』をふまえ、さらに新しい視点から米山の人物像に迫った1冊。特に、金融界での活躍や、「米山梅吉伝」ではあまり多く語られなかった三井報恩会の事業について掘り下げ、奉仕の人米山梅吉に迫る1冊です。現在、一般書店では手に入らず、米山記念館のみで取り扱い中。



谷内宏文著 新風舎刊 文庫版
本文369ページ／890円

購入ご希望の方は、書名、数量、お名前、連絡先をお知らせください。
商品が到着したら同封の振込用紙にて代金をお支払ください。
商品代金の他に、別途送料をご負担ください。

お申し込みは 公益財団法人 米山梅吉記念館
TEL:055-986-2946 FAX:055-989-5101

米山梅吉記念館のご案内

新幹線三島駅よりタクシー5分
東名沼津ICより15分

【開館時間】午前10時～午後4時

【休館日】 ●月曜日
●12月28日～1月4日
●整理のための休館日(5月・8月の特定日)

米山梅吉記念館 館報
Vol.29 春号

発行日／平成29年3月20日
発行者／公益財団法人 米山梅吉記念館 理事長 渡邊 健助
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1 TEL(055) 986-2946 FAX(055) 989-5101
URL <http://yoneyama-umekichi.jp/> E-mail yumh@ai.tnc.ne.jp

米山梅吉記念館 館報

2017 春号 Vol.29

THE YONEYAMA UMEKICHI MEMORIAL HALL REPORT



公益財団法人 米山梅吉記念館



青山学院綠岡初等学校の米山梅吉校長と教職員の方々(前列右から四人目・米山梅吉校長 五人目・中山国六主事)

昭和十二年三月、綠岡小学校は第一期工事を完成して、四月一日に新入学童を迎えた。時に校庭は桜花爛漫、校長米山梅吉は学童と保護者の前に立って、莞爾たるものがあった。自分の理想の小学校が発足したのである。しかし講堂がまだ出来ていなかったから、入学式場は神学部の社交室だった。この辺は綠岡小学校主事中山国六氏の思い出に負う。米山さんは保護者への挨拶に、学校の全費用は完成まで自分の手で弁じさせて戴くから、学校後援会とか保護者の後援団体とかは一切御免蒙ると述べた。児童の教育は学校で行うから、父兄に於いては悉皆委せて、教育上の干渉をしないようにと求め、教師と父兄の関係は児童教育の圈外に出てはならないと注文した。学童に向かっては、言語、服装、容儀を正しくすること、人に迷惑をかけないこと、人にされて嬉しかったことを人にもすること、誠実を第一として虚偽や偽善を厭うこと等を第一印象として残すことに努めた。

綠岡小学校と共に綠岡幼稚園が出来た。これは春子夫人の寄附だった。春子夫人が園長を承って毎日出勤した。一家総出ということになる。

『米山梅吉伝』より
佐々木邦著「創意と奉仕の一生」より
抜粋

綠岡初等学校

綠岡小学校は小さいものだが、今多くの可愛い学童が集まって、最も行き届いた初等教育を受けている。米山先生、靈あらば、校庭に遊ぶ子供達を見て、いろいろのことを行なつたけれど、綠岡小学校がやはり一番よかつたと思って満足するだろう。(佐々木 邦)



講演



理事長挨拶



生子哲男2620地区ガバナー



来賓

平成28年9月24日(土)米山梅吉記念館秋季例祭が開催され、第2620地区生子ガバナーはじめ地区内外から約120余名が参加されました。

講演は、「ロータリー留学とアートプロジェクト～伊豆の国際的な文化創出をめざして～」と題して、元ロータリー奨学生のあわやのぶこ氏によって行われました。

あわや氏は、1808年に建てられた中伊豆の庄屋の家に生まれ、幼い時から古いものを大事にする生活をしてきました。

大学時代にロータリーの奨学金を得てアメリカに留学し、様々なカルチャーショックを受けて帰国しましたが、この経験を生かして実家「知半庵」を舞台にジャンルを超えたアートプロジェクトを展開してきました。

アメリカ時代にロータリーの例会で話す機会を得て緊張していたとき、「See green」と言って背中を押してくれたロータリアンの言葉が彼女の支えになった、と言うお話を伺って、参加者は大きく共感していました。

アトラクションは、丸一仙三氏による太神樂でした。傘回しや五階茶碗など、TVなどで見たことのある芸が目の前で次々と披露され、皆さんのが釘付けになりました。

つづく懇親会では、日本の文化と伝統で繋がった講演とアトラクションの話題で、歓談の輪に花が咲きました。



アトラクション

「ロータリー留学とアートプロジェクト」

-伊豆の国際的な文化創出をめざして-



旧ロータリー中央事務局を訪問して

国際ロータリー奨学生として米国留学した70年代半ば、私はエバンストンのロータリー中央事務局(旧)を訪問しました。木造の一軒家で、その家庭的な雰囲気に驚きましたが、この米山梅吉記念館にいると、その暖かな雰囲気の記憶が蘇ってきます。

伊豆と私とアートプロジェクト

私は伊豆生れで、生家は江戸時代後期に建てられた旧街道ぞいの家です。築200年以上になりますが、今も国の登録有形文化財「旧菅沼家住宅：知半庵」として健在です。その家で私は2007年よりアートプロジェクトを始動させました。ジャンルを定めない年一度のアートプロジェクトです。

知半庵々主・知半アート代表・元R財団留学生

あわや のぶこ

[略歴]

伊豆生れ、東京女子大学在学中に国際ロータリー奨学生として南メソジスト大学に留学。卒業後、ジャーナリストビザを得て再渡米。アジア系アメリカ紙、国連協会などのスタッフを務め、帰国後は、異文化をテーマに執筆活動。2000年より私大で異文化コミュニケーションを教えている。

2007年には、江戸時代の旧菅沼家住宅「知半庵」をアートの場とする「知半アートプロジェクト」を始動させ、文化交差をテーマに質の高い国際的なプロジェクトを企画、主催している。



その昔、伊豆半島はとても貧しかったようです。私の曾祖父が田中村の村長時代に経済緊縮政策を行いましたが、同時に女子の寺子屋教育を徹底させ、教育と文化に力を入れたと伝え聞いています。文化教育をおろそかにして地域の発展はないと思ったからです。知半庵は庄屋の家として昔から人の出入りも多く、また文化センター的役割も担っていました。五所平之助さんは祖父の句会の常連でしたし、久保田万太郎さん、林英美子さんもおいでになり、芸術家、僧侶、文化人が交流しました。知半庵をアートで開くことを考えたのは、こんな香りが私の中に入っていたからでしょうか。

「知半アートプロジェクト」には3つ特徴があります。

①テーマは文化交差、異文化コミュニケーションです。例えば、古民家だから尺八コンサート、ではありません。古楽器を使い、修善寺の旭滝を描いた江戸時代の古典の名曲も、また創作した現代曲も演奏します。演奏家の出自も異なる組合せでコンサートを企画しました。



②ジャンルは定めておらず、現代舞踏、美術、写真など色々なジャンルのアートを企画しますが、決まっているのは伊豆という場所、この家を活用し、ここでしかできないアートを展開すること。作品を持ってくるのではなく、アーティストが伊豆からインスピレーションを受け、この場から立ち上がるものを作品にします。

③開催は年に一度。内容により開催季節も異なっています。各プロジェクトは少なくとも2、3年前から準備し作り込みます。

第6回セシル・アンドリュ展「沈黙の鼓動」は、フランス大使館の後援だけでなく日仏文化協力90周年の行事に指定され、第3回目の日米尺八コンサート「江戸の尺八、時空を翔る」は、翌年チェコ芸術祭に行き、第2回現代舞踏「伊

豆の家」は、翌年、交流基金を得てアメリカで公演しました。質の高い国際的なアートを、伊豆の地方から発信したいのです。



アートプロジェクトの原点:留学

さて、どうしてこんなプロジェクトを始動させたのでしょうか? 自分でも謎ですが、その源泉がロータリー留学での異文化体験にあるということは確かです。

「Are you OK?」から始まった異文化体験

初めて国際線の飛行機に乗り、米国ヒューストン空港に着いた時、空港ビル内で大きな荷物をひきずり転んでしまいました。痛さをこらえやっと顔をあげると目の前に小学1、2年生ぐらいの可愛い金髪の男の子がいて、私の顔を覗き「Are you OK?」と言ったのです。この違和感! 『こんなガキに、あんたOKか?』と言われる筋合はないわと生意気な女子大生は思ったのですが、足の痛みの中から「Thank you. I am OK.」と返すしかありませんでした。しかし、後で気が付いたのは、英語にはほとんど敬語がないという事実でした。どんなに年上の人でもyouはyou, IはIです。この男の子を生意気と思う大学生の私の方がおかしい訳です。

かくして、米国での生活が始まりましたが、現代のように何処にでも日本人がいるような時代ではなく、私の留学先の大学でも日本人学部生は私だけ。周りの人もほとんど日本に興味がありません。時々、出身をきかれ、日本と言うと「あ、そう、僕、香港に行ったことあるよ」とか「ハワイに行きましたよ」などと言われます。日本はまさに極東の端っこにある知られざる国だったのです。

ある日、食堂で学生から「日本は赤道の上にある? 下にある?」と聞かれて当惑。この頃から、いかにこういう無知な質問にユーモアをもつて切り返すかを考えるようになりました。相手を責めるのではなく、それをチャンスに、何か面白い展開があれば、お互いに楽しく理解しあえるのではないか。大げさに言えば国際交流にもなるのではないかしらと。

ちなみに、私の答えは「どちらでもないわ。日本は地球のど真ん中にあるの」でした。驚く相手は、たいてい自分が日本の地理を知らないことを恥ずかしい思いだし、日本を巡る会話へと繋がり、彼らも日本についての知識を増やしていくのでした。

当時は日本人への蔑称Japも残っていました。ある日、すれ違った学生に「Hi, Jap」と挨拶され、とっさに「Hi, Yankee」と答えたたら大笑い、その学生とはすっかり友達になりました。

偏見や無知は私たちにもあります。東欧の地図やアフリカの国々など、よく知らない世界はあるでしょう。相手の言葉に硬直せず、互いの無理解や誤解を解いていくことが大切です。留学時代、文化の違いから、むしろ何かが生まれる、ということを身をもって体験したように思います。

異文化コミュニケーション学では、文化の違いは大前提で、文化の違いこそ意味がある。という考えです。人は同じだから理解できる訳ではありません。違いを理解し、違いを楽しめるようになることが心の豊かさを生みます。アートプロジェクトで文化交差をテーマにしているのもそんな思いからです。

過去と現代、日本と外国、異なった文化の人々を繋ぐようなプロジェクトを伊豆の江戸時代の家の中で展開したいと思ったのです。

エアコンサート

2016年春にフルート、尺八、三味線、歌という4人の構成のコンサートを企画開催しました。この4つの楽器を私は西欧楽器と邦楽器と考えず、これらを4つのエア楽器と考えて「エアコンサート」と名付けました。音楽はすべて空気の振動で起きます。そういう原点に立ち返って、エアの楽しさ面白さを味わえるコンサートという概念で曲を組み立てました。

この伊豆の小さな場所から新しい試みをしています。県外の関東一円だけでなく、毎年、奈良など関西からも、そして、フランス、アメリカ、中国、スエーデン、マレーシアなど外国の方も見えます。東京で忙しく働く若い女性で、これまで全出席の方もおられます。2017年秋は写真展を開きます。でも写真展という概念を打ち破るような、この場でしかみられない展示になるでしょう。私たちのプロジェクトが一種の心の玉手箱でありたいと思います。国際的というのは、ただ広く世界に知られるという意味でもありません。国や世代や性別を超え、文化と文化がクロスすることを意味します。知識のあるなしに関わらず、皆が楽しめるアート企画を立て実施ていきたいと思います。

あるロータリアンの言葉 「SEE GREEN!」

さて、最後に大事なことを1つお話しします。忘れぬロータリアンのことです。私は留学時代ロータリー会によく呼ばれ、今日のように講演をし、日本紹介をしたり自分の経験を話したりしました。始めは慣れないし、英語ですし、招待されるたびに緊張ばかりしていました。当時は留学生も少なく、日本への理解も浅かった時代で学生ながら日本代表のような責任を感じてマイクの前に立ちました。

そんなある日のこと、ダラス市のある地区に呼ばれて話をすることになりました。着物姿で、自分の番が来るまで緊張していました。『みんなが、日本の話を面白いと感じてくれるだろうか、私はうまくしゃべれるだろうか?』とドキドキ。その時、スタッフだったロータリアンのおじ様が、私の様子を見てとり、謎のような言葉で話しかけたのです。「SEE GREEN!」



えっ、See green? 彼は説明してくれました。「大丈夫だよ。ほら、君の前に青信号が見えるよ。さあ、安心して渡ればいいんだよ」と。つまり、ここまで来た自分を信じて、この通りを渡ればいいんだ、と。なんだか、人事を尽くして天命を待つ。に似ています。壇上に上がる時も、いたずらっぽく目くばせし、この言葉をはき、「ほら、通りなさい」と。そして、その日、彼のおかげで私は無事講演を終えたのでした。

何十年もたった今でも、私はこのロータリアンの言葉を、折に触れ思い出します。プロジェクトを始動させる時も不安はありました。皆さまの前に立ち、こうしてお話しする時も緊張します。でも、どこかで「ほら青信号が見えるよ」と、この言葉が背中を押してくれるのです。

こんな暖かい言葉を、極東の小さな国から来た女子大生にさりげなくかけてくださったことは、ロータリアンの優しさを象徴しているように思います。ご清聴ありがとうございました。

シリーズ 米山梅吉追憶集

米山梅吉 Episode エピソード



豊富な資料を駆使して読み解いた貴重な一冊です。
書簡や著作物などの資料を多数収録。

Vol.1

米山梅吉伝

米山梅吉を追慕して青山学院初等部が発行者となり、昭和61年4月7日初版発行された『米山梅吉伝』は、総ページ620ページの大作です。この書の最初から135ページまでは佐々木邦氏による「創意と奉仕の一生」という米山梅吉の一代記で、米山と親しく交わった筆者の視点からエピソードも含めて詳しく米山の人物像が描かれています。それ以後は追憶集としてご家族、三井銀行関係、三井信託関係、青山学院関係、ロータリー関係、米山梅吉の文藻などに分けて、それぞれ氏と交流のあった方々が、ご自身と米山梅吉との関わりの中から思い出を語られています。

今後もこの館報で米山梅吉伝より抜粋させていただき、人格者教育者としての米山のエピソードをご覧いただきたいと思っています。

佐々木邦著 青山学院初等部刊
A5判／上製本 ケース付き
本文590ページ／4,000円

青山学院 関係

笹森順造
(元青山学院長・元国務大臣・参議院議員)

「処人藹然の先生」より

先生が三井報恩会の事業を主催しておられた時に、たまたま東北は大凶作に襲われ、東奥義塾常盤野農場の小作人が、困窮に陥りその託児所の児童等が、悲惨な状況を呈しました時に、先生は弘前にお出下され、七里の山路を越えてわざわざこの託児所を御視察下され、誠に貧しい山奥の児童等を愛撫せられ、一緒に記念写真の中にお入り下され、暖かい援護の手をさしのべて下されたことは忘ることの出来ない感謝であります。(中略)

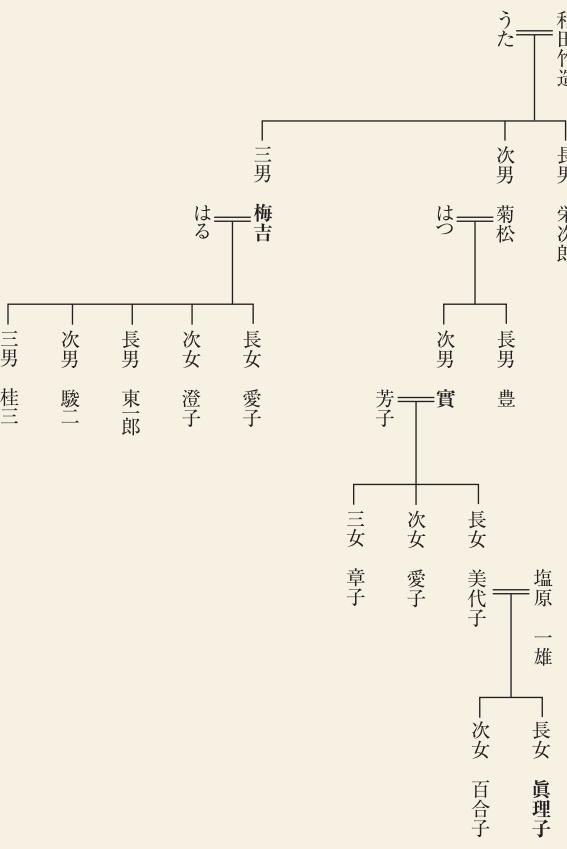
先生は自ら持することは極めて簡素であり厳格ですが、人に施すことは誠に懇篤でまた寛厚であります。

米山先生は青山学院の全体に心をお配りになり、その興隆のために最も頼み甲斐のある大先輩として力を注いで下さいましたが、特に学院の緑岡小学校のためには御自身の負担に於て創立し維持し経営し、教育と行政の全責任を完うされ、生徒の愛育に尽くされたその熱情は誠に涙ぐましいものがありました。先生が主宰する小学校の理事会に私は出席して、色々な協議をするたびごとに、先生が払われる有形無形の大きな犠牲にはいつでも深い敬意を捧げずにはおられませんでした。(中略)

先生に接して、その人格から流露して受ける感化は、先生は純真な方で、人の言をそのまま信じ、且つ自ら然諾を重んじ、その一言は正に千金の重さを持つということでありました。従って虚偽や誤魔化しは最もおきらいになりました。先生は正邪曲直の区別をはっきりして、然りを然りとし、否を否など明確にされました。先生が学院の学生のためになされた有名な科外講座を収録して刊行された「常識閑門」や「看雲録」を先生御自身の署名入りで私に贈って下されたのを今尚書架に飾り、これを繙いて先生を敬慕するよですがしております。

和田家と 米山梅吉

この度、横浜市在住の橋本眞理子様より40数点の資料をご寄贈いただきました。梅吉の実父和田竹造は士族で、橋本様は、梅吉の実兄和田菊松の二男和田實氏のお孫さんにあたります。實氏は、青山学院大学卒業後、第一銀行本店調査部に勤務されました。實氏は従妹にあたる梅吉の長女愛子さんとも年齢が近く、学生時代には万代順四郎と共に梅吉の家に一緒に住んだこともあるほどで、梅吉一家とともに仲が良かったそうです。實



橋本 真理子さん

氏が結婚したときには、梅吉がドイツ製の時計を記念に贈っています。橋本様のお母上美代子様が實氏の長女にあたります。また、美代子様は橋本様に幼い頃から米山家と實氏との関係も幾度となく話され、橋本様はこの話をよく覚えておられたそうです。橋本様に男の子が誕生された時には、愛子さんが實氏夫人芳子様に「曾お祖母さんになられたそうですね」とお祝いのハガキも送っています。このようなご縁が続いて、愛子さんと和田家は、愛子さんの晩年まで交流があったということです。

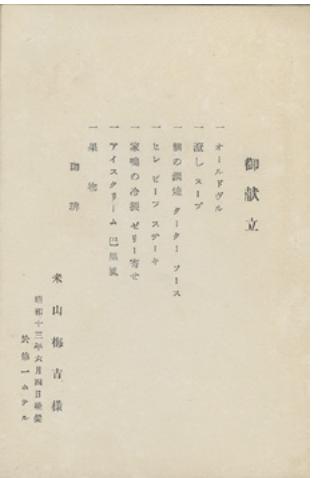


和田家ご一家／左から實氏、美代子様、芳子様(昭和6年)

寄贈された資料は、梅吉がアメリカから長兄栄次郎、次兄菊松に宛てた手紙、梅吉が實氏に宛てた手紙、米山春から實氏へのハガキ、また梅吉の二男駿二氏から實氏宛の手紙数通、三男桂三氏の手紙、高木愛子さんから實氏夫人芳子様宛の手紙等です。梅吉の手紙については今まで拝見していましたが、その子ども達の資料については、あまり目にする機会がありませんでした。特に梅吉の二男駿二が實氏に宛てた手紙には、苦悩する若者的心の叫びが率直に記されており、駿二が實氏を信頼して吐露せずにいたいられなかった当時の心境が、痛いほど伝わってきます。



米山家でよく催されたという会食会のメニューもありました。米山家では、特別なことがなくても、たびたび食事会や観劇の会が開かれたそうです。さすが米山家、メニューを見ると洋食や中華のフルコース。しかも、梅吉夫人春さんは作法には厳しい方であったようで、参加者はそれなりの気構えがなければお食事もできなかつたでしょう。傍から見れば羨ましい帝劇での観劇も大変だったのかかもしれません。



今回寄贈された資料の中でも特に注目すべき一点に三冊の「詩韻自在」があります。和綴じの本で菊松の丁寧な文字で綴られたこの本は、漢詩を作るにあたって使用するいわゆる韻引辞典で、漢詩制作時の手引きとなるものです。欄外にも細かに記された文字を見ると、菊松の几帳面な性格と漢詩にあたる真摯な姿が浮かび上がり、大変貴重なものです。



これまで、梅吉の実家和田家については資料も少なく詳しいことがわかりませんでしたが、実兄菊松氏も農務省の役人を務め、プライベートでは歌人名秋邨として漢詩をたしなむなど、充実した生

活を送っていたようです。橋本様は「これは実母和田うたさんの影響が大きいのではないかでしょうか」と語られました。三島大社の神官の娘として生まれたうたさんは、当時としては珍しく読み書きができる女性で、子ども達の教育をしっかりしたのではないか。梅吉は20歳の時に米山家に養子に入り米山梅吉となつたが、梅吉の人間としての礎は、和田梅吉の時に育まれたものであろうと考えられます。實氏も銀行勤務といつても数字の計算ではなく、調査部として該当企業の現状について文書として報告することが仕事であったそうです。書物が好きだった實氏が残した本には子規全集などもあり、實氏が趣味人であった一面も窺えます。残された手紙や写真は、うたの教育が菊松や梅吉さらにはその子ども達にも、きちんと受け継がれた証しでないでしょうか。



和田實氏／銀行マンとして活躍された實氏

これらの資料は、實氏が芳子夫人に命じて夫人の実家のある足利に疎開させていたため、戦火を逃れることができました。和田家の荷物はかなり大がかりなもので、實氏が大切にしていた子規全集などは、電車で何度も往復して運んだそうです。資料の詳しい検証はこれからになりますが、四代にわたる梅吉一家との繋がりを語り継ぎ、100年以上前の手紙や写真を大切に保管してきた橋本様にあらためて感謝申し上げます。



①三世前に立つポール・ハリスお手植写真碑



②いずみ公園の立像の両脇へ



出雲大社境内

追伸

ポール・ハリスお手植えの枯れてしまった月桂樹から、木植やペーパーナイフ、茶杓が作られ、ペーパーナイフの一つは、米山梅吉記念館の展示場に展示されている。



ポール・ハリス お手植えの 月桂樹三世

(館報28号につづいて)

ロータリーの創設者ポール・ハリスは東京を訪れた折、来日を記念して帝国ホテルに月桂樹を植樹した。その後、変遷を経て昭和49年米山記念館に植えられたポール・ハリスお手植月桂樹二世は、今も記念館の庭にある。10年程前から樹勢の衰えが目立ち、再生を計るべく、樹木医などの専門家の方々のアドバイスをいただき樹勢の再生に努めた。しかしながら、ここ何年もの猛暑で樹皮が枯れて傷み、葉も弱って煤病が蔓延している状態で、見るからに痛々しい樹姿となった。渡邊脩助記念館理事長は心を痛め、樹勢の回復に努めると共に、後継策として、この月桂樹二世から挿し木した三世の苗木を育成することを提案された。

これに呼応した三島RCは、委員会を設け久保田会員を中心に長年のご努力(28号既報)によって三世27本を活着させた。

この由緒ある三世の苗木は、平成28年4月12日、米山記念館の月桂樹二世の傍らに植樹した(写真①)。

また、平28年11月16日、米山記念館と長泉ロータリークラブが共催し、長泉町の協力を得て「^{*}いずみ公園」の梅吉翁立像の両脇に植樹した(写真②)。米山記念館と長泉RCでは、今後協調してこの月桂樹を大切に育てていきたいと思う。

月桂樹三世は、この他にも多くの場所で記念樹として由緒を引き継いで育成されている。

千 元室ロータリー日本財団理事長、出雲大社境内、甲府北RC、三島市・佐野美術館、三島市・中郷西中学校、長泉町・知徳高等学校など。

※平成2(1990)年4月28日町長は、日本のロータリー創始者・奉仕の人「長泉町が生んだ郷土の偉人 米山梅吉翁」を顕彰し、役場前「いずみ公園」に翁の銅像を建立した。



長泉ロータリークラブ米山文庫運営会



スクリーンに見入る子どもたち



読み聞かせ会



カルタ会

